

ボクの故郷は、鹿児島県出水市で、鶴の飛来地として有名であり、いまは水俣病訴訟で頻りに新聞に登場する。出水市を舞台にした小説は少ないが、水上勉の『鶴の来る町』がある。NHKの連続ラジオ小説で聞いたのが最初だった。森繁久弥の朗読がもの悲しく、郷愁を誘ったことを鮮明に覚えている。

主人公は刀禰吉、幼い娘を連れ、菜の花を求めて日本列島を渡り歩く孤独な蜂飼い、養蜂家だ。出水市の定之段という麓にテントを張り、蜂を飼い、蜜を採る日々。時折呑みに出かけたのがつけあげ(薩摩揚げ)で有名になる串木野で、そこでかね子という女性に惹かれ、鶴がつがいで飛ぶ姿を見て、一緒に暮らしたいと思いを馳せるようになる。その情景の描写が美しく、もの悲しい。

水上勉が出水を訪れたのは昭和34年のことで、関係ないが、ボクは小学校2年生だった。その頃の鹿児島は貧しく、水上作品に登場する越前海岸の集落と重なっていた。隣接する水俣市では、当時は奇病と呼ばれ、まもなく水俣病と認定される公害問題で騒然となり始めていた。水上勉は、この水俣病の取材にやってきて、直後に『海の牙』を著した。いわば、『鶴の来る町』は副産物のような作品だった。

家族を持ちたい、孤独な蜂飼いは夢を膨らませた。しかし、出水の次の流転地北海道への蜂の巣箱の移送を貨車



水上勉の社会派小説とボクの故郷

便に託したが、ストライキで列車のダイヤは混乱、蜂は駅留めで全滅する。消沈した刀禰吉に変わってかね子が補償交渉に臨むが、国鉄労使の壁は厚く、理不尽だった。そして、座り込みの最中、病身の刀禰吉は死んだ。かね子が骨壺を抱き、刀禰吉の忘れ形見の娘を連れて出水に帰ったのは、秋の終わりの頃だった。

補償交渉や座り込みは、水上勉が水俣で見た光景だっただろうが、あの頃、激しい社会変動の時代に踏みつぶされる人々の哀しみの光景はいたるところにあった。それを見た水上勉は、「社会派」になりきれなかったのかもしれない。松本清張の社会派小説もいいが、「社会派」になりきれなかった水上作品も味わい深い。

実は、ボクがこの小説を思い出したのは、鶴の来る季節がやってきたこともあるが、かつて鬼の動労とまで言われた旧国鉄の労働組合のカリスマ的指導者だった松崎明さんの訃報を新聞で見たからでもあった。ボクは、松崎さんとは一面識もないが、孤独に死んだ蜂飼いへの「社会派」の感慨を聞いてみたいと思った。詳細はまた報告するが、大阪市が今頃になって同和対策の奨学金の返還を命じるという。市の対応は理不尽と思うが、もう一方の当事者であったボク達の解放運動も、「社会派」の感慨を問われることになると思う。

(株)ナイス代表取締役 富田一幸



hidarimakiの
この逸編

につぼん昆虫記



監督：今村 昌平
音楽：鷺 敏郎
脚本：左 幸子
吉村 実子
北村 和夫
製作：日活作品
上映公開：1963年/秋
配給：日活

今では「阿倍野ルシアス」の最上階にシネコンが設けられ、8つのスクリーンで映画を見ることが出来る。しかし、僕が子どもの頃は、たしか邦画を中心とした近映劇場と、洋画系のアポロ大劇場など経営体の同じ2、3の映画施設が離ればなれに建っていた。

高校の頃、課外授業として近映劇場で上映中の文芸作品を見ることになった。僕は文芸物が嫌いで同級生たちからこっそり離れ、エリザベス・テイラー主演の「クレオパトラ」を見るためアポロ大劇場に侵入し、リズの豊満な肉体を70ミリ大画面で堪能したのだった。ところが、上映中右隣の男が時折こちらの様子を伺うので、暗闇の中で目を合わせてしまったところ、あろうことか男は教頭先生だった。やはりリズを楽しんでいたのだ。翌日以降、教頭に会うと共感にも似た親しさを感じて挨拶したことを覚えている。教頭は少しばかり顔をそらせながらも会釈をしてくれた。

「につぼん昆虫記」は、ほぼ同時期近映劇場でロードショーされた。この映画に使われたポスターは、性の目覚めまっただ中の僕に、リズを遥かにしのぐ衝撃をもたらした。何しろ男が女の乳房を愛撫する大写しが描かれていたからだ。

東北の寒村に生まれ、貧困と困習の中で家を守るために嫁いだ女は、しかし頭の弱い父親に近親的な愛情を報いている。しかし組合活動に絶望し、田舎を棄て、都会の中で様々な仕事に就く中で宗教や男にだまされながらも、女を武器に世間を見返していく。

大正から昭和38年までの約半世紀間を、砂川闘争・安保闘争・伊勢湾台風・皇太子成婚などのシーンを背景に配し—しかしそれらは登場人物たちにとっては点景に過ぎない—大衆生活史を立体的に構成した骨太な作品となった。今村監督のエネルギーと腕力が詰まった演出には重量があり、モノクロ画面の光と影が人物の存在感をより深くした。何よりも少女時代の純情さ、村を追われ都会で徐々に成り上がっていく図太い女を演じる左幸子の主人公には凄みがあり、こんな演技の出来る女優はもう見られない。

性を道具に、人を利用し男を取り込んでいく。やがては彼女も社会の移ろいに裏切られ、娘からも裏切られて方向を失っていく。人のはかなさ、頼りなさを監督はニヒリズムではなく、我欲を背景にそれでも人間は生きていくという不動の胆力に希望を残す。それは主人公が詠う、貧しさや生活、出自を笑うユーモラスな短歌で表現され、人間の原初のおおらかさであった。63年邦画の収穫であり、時代を超えた逸編であった。

hidarimaki

